

亞細亞の西洋化ではない。西洋の亞細亞化である。西洋の知に對して、亞細亞の靈を呼びさますの時なのだ。物質文明を崇拜しつゝひたすらに泰西を模倣し、利己主義のうちに安息しつゝある人々よ、窓を開け！ 再び慈母の懷に還れ！ 古き亞細亞の人々よ、永き眠りから醒めよ。最も古くして最も新たな大亞細亞精神に還つて西洋物質文明に酔ひたる人類を救へ！

## 明るい世界へ

矢 谷 智 秀

明るい世界に住まう！ 明るい世界に住まう！ それは何んと言ふ氣持のよい言葉だらう。

視よ蒼々たる天日の下に、生きんとして息まざる草木を！

少さく路傍に虐げられた無名草でも、彼等は自己が生きてる限り斷へず、明るい世界へ／＼と伸びて行くではないか。此の生きんとする努力こそは、彼等の本性であり、亦彼等をして有終の美を全ふせしむる力そのものではないか。明るい世界へ住まう、それは凡てに靈長であらうとするものの誰れしもが求めて息まざる所のものであり、亦等しく求めなければならぬ世界である。

然らば夫の明るい世界は何地に造られ、その偉大なる建設者は如何なる人間であるか！ 又奈何なる全能の神であるか。

喜ぶべきかな！ 人類のみあらゆるもゝ靈長として最も優れたる「思考」の力を、先天的に與へられてゐる事を！

「此の世の外に全く常寂あるに非ず、豈伽耶を離れて遠く菩提を求めんや」と

自己こそ明るい世界の建設者であり、自己の現在生存しつゝある所こそ、明るい世界でなければならぬ。自然界に於ては旭日天に昇りて天空を馳ける時のみが明るい世界であり、夕陽西山に歿すると共に直ちに暗黒の世界となる。然るに吾々人間界に於ては、赫々たる天日のもとに於て、尙闇黒と、諍鬪の世界を築き、唯一條の光線にすら恵まれない抗道の深底にも、自由に明るい世界を見出し得る。

然らば余の明るい世界とは何ぞ！ 又それは如何なる有價値的内容に因つて構成されてゐるものであるか？ 吾々が朝に希望を追ふて歡喜の中に働き、夕に満足に浸りつゝ感謝の念の中に眠る、これが吾々の造り得る明るい世界の凡てである。

心以外に何等の資本も用具も必要としない、「心外無別法」とは此の境の理想か。心眼の力に依つてこの現實そのものゝ中に永劫の相なる理想の寂光土を視る。それが欣求の努力を以つて吾々は現實に働く。歡喜充滿した最も高き理想の信念と希望とをもつて、最も近い吾々の現在、最も深い現實の奥

底を出発点としなければならない。

「時」……を如何に最も有意義に使用すべきか、久遠の過去から悠久の未來へ、時は流れて行く。其の世の中に流轉し、生息しつゝある凡てのものは、常に現在と言ふものを所有してゐる。然らば無限の未來と過去との間に介在してゐる現在とは、如何なるものであらうか。

未來を俯瞰すれば、廣漠たる空想や理想の世界が擴がつてゐる。過去を仰ぎみれば、そこには爲して止みたる屍が轉がつてゐるばかりだ。現在に忠實に生活して行く可きだと言ふ人々よ！如何なる事をも、おんみ等が考へ様とする所は未來で、考へ了つた時、それは既に過去である。現在とは「思考」即働きそれ自身である。

現在に忠實であると言ふ事は、未來と過去との否定ではない。現在即働きつゝある「思考」それ自身こそ豈に世を貫き、横に十方を徹してゐるものである。

この「思考」こそ生ける實在である、永劫に生くるものは是實在である。瞬間に永遠を見る。この瞬間の中に然も、未來の輝かしい理想の花があり、亦過去の尊い史的魂がある。吾々がそれを認め得た時、之れに對する欣求の努力、現實の活動こそは、凡て是れ歡喜であり、感謝である。今正に感謝の眠りに就かうとする時、自分が今日爲した行爲を反省すれば、吾々が將に爲さんとする未來の羅針となる。

過去、現在、未來それは我々の作り爲した時の微妙な連鎖である。希望に醒め、歡喜に働き、感謝に眠る。

おと……そこに偉大な明るい世界は築かれ行く。斯くて私は懊惱から歡喜へ、暗黒から光明へと進んで行く。

## 宗教的生命的深さ

竹 多 快 照

靜かに冥想にふける。地球上に人類が生存して以來の儒要に應じて生れた宗教の数はどんなに多い事だらう。それ等宗教の興亡變遷の跡を探究するならば、古今獨歩の優秀なる宗教、或は線香花火のやうに其場限り消ね去つた宗教等千差萬別數限りもないであらう。併し如何に偉大なる宗教でも最初は唯一個人の意識内容の一事實に過なかつた。この事實を言葉または行爲に表現した。それを大衆は耳より眼より己が意識へ受容した。かくて最初証覺を得た人と共通した思想信仰を大衆が持つやうに